

平成 27 年 10 月 2 日	病虫害発生予報 10月号	茨城県病虫害防除所 茨城県植物防疫協会
---------------------	-------------------------------	------------------------

**農作物の収穫後は被害残渣や被害葉を持ち出す等
圃場管理に努め、次作の病虫害の発生を抑えましょう。**

< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病虫害】	
イチゴ：うどんこ病	1
サツマイモ：ナカジロシタバ	1
レタス：菌核病	2
共通害虫：オオタバコガ	2
【防除所レポート】	
平成 27 年における水稲主要病虫害の発生経過	3
【その他の病虫害】	
ナシ，促成トマト，秋冬ハクサイ，レタス，秋冬ネギ，共通害虫	5
II. 今月の気象予報	
	6

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病虫害防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病虫害防除所 Tel : 029-227-2445
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。
ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/byobo/bojo/>
フェロモントラップデータ随時更新中

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、発病葉率(本年値 1.0%, 平年値 0.2%)は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
- ② 罹病部は新たな伝染源となるため、できるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードもしくは系統の異なる薬剤を用いてローテーション散布する。
- ④ 発病の予防には、硫黄のくん煙処理が省力的で有効である。
- ⑤ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。
- ⑥ 薬剤によっては、果実に汚れが付くものもあるので、十分注意する。

サツマイモ

1. ナカジロシタバ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、被害つる先率は平年よりやや高く(本年値 58%, 過去5年平均値 42%), 100葉あたりの寄生幼虫数は平年よりやや多い(本年値 5.8頭, 過去8年平均値 2.0頭)。

[防除上注意すべき事項]

- ① 薬剤防除を行う場合は、収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。
- ② 薬剤散布は、幼虫が生息する葉裏までかかるように丁寧に行う。

レタス

1. 菌核病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
早い	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、発病株率（本年値 0.46%，平年値 0.03%）、発生地点率（本年値 15%，平年値 1%）ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 菌核病の発生を認めた場合は、菌核を形成する前に発病株を適切に処分する。
- ② 多発すると防除が困難となるので初期防除を徹底する。また、降雨が続く場合には適宜防除を実施する。
- ③ 薬剤散布は、葉裏や株元に薬液がかかるよう丁寧に行う。また、周辺作物等へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意して散布する。

共通害虫

1. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月のフェロモントラップへの誘殺数は、水戸市（県予察圃）で平年より多く、筑西市で平年よりやや多く、土浦市、龍ヶ崎市、坂東市で平年並である。
- ② 9月下旬現在、レタスでの寄生株率は平年より高く（本年値 0.46%，平年値 0.01%）、秋冬ハクサイにおける寄生幼虫数は平年並である（本年値 0.06 頭、平年値 0.09 頭（25 株あたり））。

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培ではハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ② 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。なお、防除適期はフェロモントラップへの誘殺数が増加したときであるので、誘殺状況（病害虫防除所ホームページ参照）を参考にする。
- ③ 薬剤散布は、葉裏や株元にも薬剤がかかるように丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、IRAC コードもしくは系統の異なる薬剤を選択する。
- ④ レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、定植時及び結球始期の防除を徹底する。
- ⑤ トマト、ピーマン等では収穫終期まで加害が続くので、発生しているハウスでは、防除を徹底する。

平成 27 年における水稲主要病害虫の発生経過

本年の水稲における主な病害虫の発生経過について、県内の調査ほ場（57 ほ場）等の調査結果をもとにまとめました。次作にむけた対応の参考にしてください。

1. いもち病

低温、日照不足、多湿等の気象条件で発生する病害である。葉いもちは例年梅雨入り後の 6 月下旬から発生し始め、7 月に最も発生が多くなる。その後、出穂期頃に降雨が続くと、穂いもちが多発生する。

[本年の発生経過]

6 月下旬～7 月上旬に感染好適条件が連続して出現し（BLASTAM*による）、県内の広い範囲で葉いもちの発生が確認された。その後、7 月中下旬に好天が続いたため、7 月下旬の発生は県全体では平年並であった。なお、県南・県西地域では平年よりやや多い発生であった。

出穂期頃の 7 月下旬～8 月上旬は気温が平年より高く日照時間が平年より多かったため、8 月上旬の葉いもちの発生は平年よりやや少なかった。その後、8 月中旬～下旬の気温が平年より低く、日照時間が平年より少なく推移したため、穂いもちの発生は平年並となった。

※BLASTAM（ブラスタム）：気象条件から葉いもちの感染好適日を判定するプログラム。

[次作にむけての対応]

- ① 種子は必ず更新し、未消毒の種子を使用する場合は種子消毒できるよう準備する。
- ② 常発地では育苗箱施薬剤を準備する。

2. 縞葉枯病

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。ヒメトビウンカの幼虫はイネ科雑草で越冬し、4 月上旬頃に成虫になって麦畑に移動して増殖した後、6 月上旬頃に成虫が水田に飛来する。水稲は、イネ縞葉枯ウイルスを保毒したヒメトビウンカに吸汁されるとウイルスに感染し、発病する。

[本年の発生経過]

6 月下旬に初発を確認した後、発生が増加し、8 月下旬の県全体における発病株率は平年よりやや多かった。また、発生地点率は 40% と高く、本年を含む過去 11 年間で 1 位となった。地域別にみると、最も発生の多い県西地域で発病株率が昨年より低下したものの、発生地点率は昨年より高くなった。この他の地域の発生株率は県南・県央・鹿行・県北地域の順で高く、県央地域を除いて昨年より増加した。発生地点率は、全ての地域で昨年より高かった。（表）

表 1 8 月下旬における本田での縞葉枯病の発病株率及び発生地点率

地域	調査 地点数	発病株率 (%)		発生地点率 (%)	
		本年	昨年	本年	昨年
県北	8	0.5	0	13	0
県央	15	1.1	1.1	20	13
鹿行	6	0.7	0	17	0
県南	19	6.1	4.0	47	32
県西	9	22.7	32.0	100	89
県全体	57	6.0	6.8	40	29

[次作にむけての対応]

- ① 収穫後は耕起してヒコバエをすき込むとともに、ヒメトビウンカの越冬場所となる畦畔のイネ科雑草の除草を徹底する。
- ② 本年発生の多かった地域では、来年のヒメトビウンカの防除対策として、育苗箱施薬剤を準備する。
- ③ 縞葉枯病抵抗性品種の導入を検討する。

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ等）

成虫は、水稻の出穂前は畦畔や周辺のイネ科雑草地に生息する。出穂とともに水田に侵入し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。ふ化した幼虫も同様に収穫期まで穂を加害する。

[本年の発生経過]

水田内における発生は、7月は平年並に推移したが、8月上旬に増加し（図1）、発生地点率、すくい取り虫数ともに本年を含む過去11年間で1位となった。特に県北、県央地域で発生が平年より多かったため（図2）、8月11日に注意報を発表した。

8月下旬の水田内における斑点米カメムシ類の発生種は、クモヘリカメムシが約9割と最も多く、次いでイネカメムシ、アカスジカスミカメであった（図3）。なお、県南地域ではクモヘリカメムシよりイネカメムシが多かった。

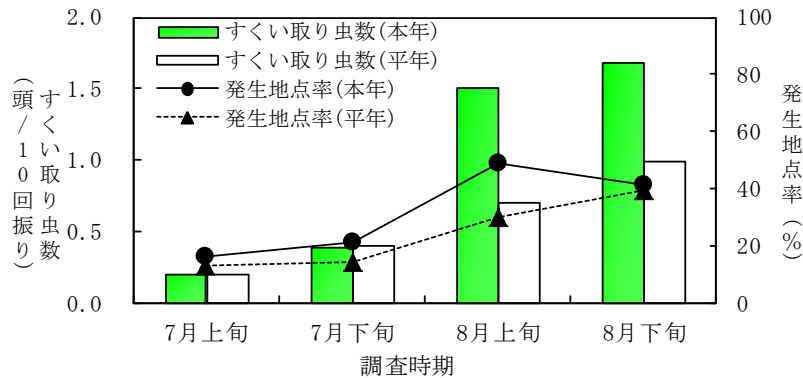


図1 水田内における斑点米カメムシ類の発生推移

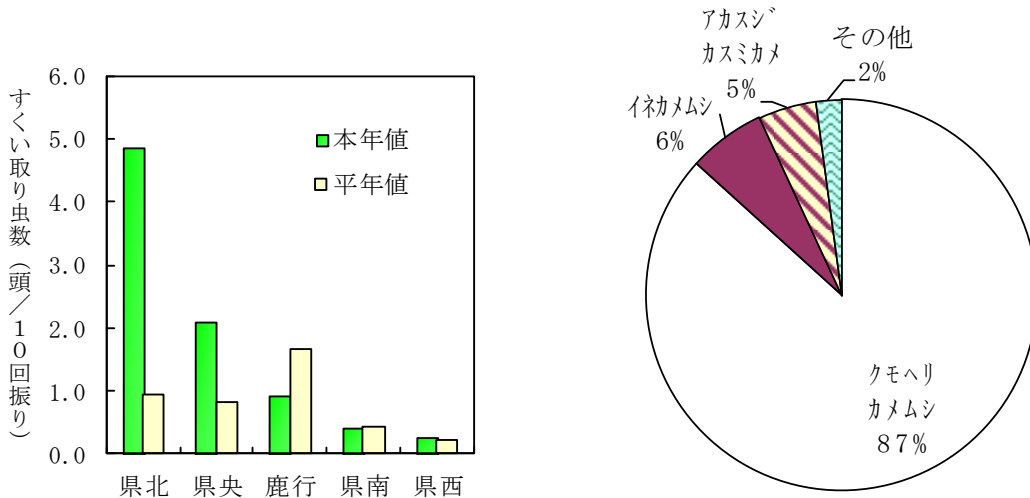


図2 水田内における8月上旬の地域別斑点米カメムシ類すくい取り虫数

図3 水田内における8月下旬の斑点米カメムシ類の種別割合

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
ナシ	黒星病	発生量：－	9月下旬現在，葉における発生は平年よりやや多い。秋季防除を徹底する。罹病葉は翌年の伝染源となるので，落葉を適切に処理する。
促成トマト	黄化葉巻病	発生量：－	9月上旬現在，抑制トマトにおいて平年よりやや多い発生である。発病株はただちに抜き取り適切に処分する。促成トマトでは，ハウスの開口部に0.4mm目合いの防虫ネットを設置する等，媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。
秋冬ハクサイ	軟腐病	発生時期：早い 発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。台風等の強風を伴う降雨の後は，防除を徹底する。
	べと病	発生時期：早い 発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
レタス	腐敗病	発生時期：早い 発生量：やや多い	9月下旬現在，平年より多い発生である。早生品種のみ発生を認めている。結球開始期に降雨が続くと発生しやすいので，防除を徹底する。
イ・秋冬レタス	アブラムシ類	発生量：多い	9月下旬現在，平年より多い発生である。
秋冬ネギ	ネギアザミウマ	発生量：平年並 ～やや多い	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
共通害虫	ハスモンヨトウ	発生量：平年並 ～やや少ない	9月下旬現在，葉菜類を主とする作物での発生及びフェロモントラップへの誘殺数は平年並～やや少ない。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 10月3日から11月2日)

気象庁 (10月1日 発表)

<向こう 1 か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	30	30	40
降水量	関東甲信全域	30	40	30
日照時間	関東甲信全域	30	40	30

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。

<1週目の予報> 10月3日(土曜日)から10月9日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または低い確率 40%

<2週目の予報> 10月10日(土曜日)から10月23日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率 40%

<3週目から4週目の予報> 10月24日(土曜日)から10月30日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率 40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、異なる作用機構分類* (FRACコード, IRACコード)の薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(平成27年4月28日発表)の防除所レポート参照